

授業難易度と満足度の関係と、大規模クラスが抱える問題

都市教養学部 人文・社会系 社会学コース・教授
宮台 真司

以下に、FD委員会と教務委員会・基礎教育部会が実施した「都市教養プログラムの授業評価」[SE = 学生による評価、TE = 教員による評価]の結果概要を紹介する。まず基礎教育部会で配られた資料、次に都市教養プログラム部会で紹介された追加資料に則して、紹介していく。

【調査対象・回収率・質問項目】

SE [学生による評価]の回収率だが、対象授業72クラスのうち回収があったのが66クラス。対象登録者10525名のうち50.5%にあたる5313名から回収があった。TE [教員による評価]の回収率だが、対象授業担当教員104名のうち71.2%の74名から回収があった。

SE [学生による評価]の質問は以下の通り。本レポートで使用する略称も併せて掲げる。TEの質問項目は、SEと同一焦点について、教員側の心がけについての自己評価や、学生の態度を観察した評価を尋ねている。問9以降は都市教養プログラム独自の質問項目だ。

回答は「強くそう思う・そう思う・どちらとも言えない・そう思わない・全くそう思わない」からの選択。順に5・4・3・2・1の得点を与えた。なお問5は「4時間程度・3時間程度・2時間程度・1時間程度・ほぼ0時間」からの選択。問10は「易しかった・やや易しかった・どちらとも言えない・やや難しかった・難しかった」からの選択で、同様に得点を与えた。

- 問1 私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ[態度]
- 問2 授業の目的を意識しながら学習することができた[意識]
- 問3 教員の説明はわかりやすかった[説明]
- 問4 教員は学生の質問・意見に対し適切に対応していた[対応]
- 問5 授業時間以外で一週間に平均どのくらいこの授業に関連した学習をしたか[時間]
- 問6 成績評価方法について十分な説明があった[成績]
- 問7 シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた[成果]
- 問8 私はこの授業を受講して満足した[満足]
- 問9 この授業の選択に当たりシラバスは役立つ[シラバス]
- 問10 この授業の難易度はあなたにとってどうか[難易度]
- 問11 この授業を受講して、自分の視野が広がった[視野拡大]

問12 (担当教員の自由設問項目、TEについてはなし)

【学生一人一人をサンプルとした平均値】

問5 [時間]と問10 [難易度]を除くと、まずSE [学生による評価]は殆どの項目が3.0から3.5の間。問12 [視野拡大]だけが3.66だ。平均的には否定的評価は皆無だが、肯定的だとはいっても3.5に届かないものが殆どだ。授業の改善余地があることを示すのかも知れない。

対応するTE [教員による評価]をみると全項目でSEより得点が高い。質問の対称性が厳密でないことを差し引いても、学生と教員のギャップが気になる。ギャップが目立つのが、問2 [意識] (ギャップ0.85)、問6 [成績] (ギャップ0.75)、問9 [シラバス] (ギャップ0.66)である。

この3項目には「再帰性 (何をしているのかという意識)」に関わるという共通性がある。一口で云えば、「シラバス通りの目標を自覚しながら受講し、この目標に照らして適切な成績評価がなされたと感じる」というプロセスがうまく回っていないことを示しているのかも知れない。

SE [学生による評価]のクラスデータ (SEを基に算出したクラス毎の平均値の四捨五入をサンプルとしたデータ)とTE [教員による評価]の回答を比べても同じだ。上述の問2 [意識]、問6 [成績]、問9 [シラバス]について、「強くそう思う」と「そう思う」を足した比率は、TEが、SEクラスデータのダブルスコアを超えるのだ。

【満足度別の平均値】

次にSE・TE双方につき、問8 [満足]の5段階評価で1・2・3と回答した者を「満足群」、4・5と回答した者を「非満足群」とし、各々について問8以外の質問への回答平均値を比べた。全体として、満足群は全質問に肯定的回答を、非満足群は否定的回答を、寄せる傾向がある。

注意すべき点が2つある。第一に、「満足する者ほど肯定的回答を寄せる」は「肯定的回答を寄せる者ほど満足する」とも言い換えられ、一方向の因果性を示すものでないこと。第二に、それに関連してこの相関には意味

論的なトートロジー（非独立性）という疑惑があり得ることだ。

実際問題として、満足群と非満足群の満足度の開きが大きいSE [学生による評価] は、開きが小さいTE [教員による評価] に比べて、尺度が違う問5 [時間] と問10 [難易度] を除いた全質問について、満足群と非満足群の平均値の開きや標準偏差が、遥かに大きいのである。

ところで、とりわけ注目に値するデータがある。SE [学生の評価] について見ると、問10 [難易度] についての回答は、満足群と非満足群の間に殆ど差がない。つまり講義が難解だったから不満足になるという傾向は殆どない。学生の満足は講義の安易さによるとは言えないのである。

TE [教員による評価] では、問9 [シラバス] についての回答が、満足群と非満足群の間に差がない。つまりシラバスを役立てられたか否かという意識が、講義実績に関する満足不満足に影響を与えないのだ。教員によるシラバスの位置づけの低さを物語るデータなのかもしれない。

【履修生数と、成績やSEの関係】（追加資料分）

都市教養プログラム部会の委員からの要請で、履修者数と、成績やSEとの相関が分析された。具体的には、(1)クラスの履修者数とクラスの成績平均の相関、(2)履修者数と成果平均 [問7] の相関、(3)履修者数と満足度平均 [問8] の相関などが、分析された。

全クラス対象の相関と別に、規模でクラスを分類し、分類内での相関が取られた。規模別分類は「100人未満」「100人以上200人未満」「200人以上」の3分割の場合と、「50人未満」「50人以上120人未満」「120人以上250人未満」「250人以上」の4分割の場合に分け、両方が調べられた。

結論的には当初懸念された問題を示すデータは得られなかった。すなわち、「成績評価が甘いから履修者が殺到」ないし「履修者が多いので成績評価が杜撰」というデータは得られず、「履修者が多いので成果が低い」「履修者が多いので満足度が低い」というデータも得られなかった。

むしろそれとは別の相関データが興味深い。クラスの成果平均 [問7] と満足度平均 [問8] の間の高い相関は意味論的なダブリゆえに当然としても、クラスの成績平均と成果平均 [問7] の相関データと、クラスの成績平均と満足度平均 [問8] の相関データが、注目に値しよう。

即ち、成績平均が良好なクラスほど成果平均 [問7] も満足度平均 [問8] が高いという傾向が緩やかに認め

られるのであるが、大規模クラス（3分割で「200人以上」、4分割で「250人以上」）には、そうした関係はないどころか、有意ではないものの逆の関係（成績平均が良好なクラスほど成果平均 [問7] も満足度平均 [問8] も低い）が示唆される。大規模クラスでは優秀な学生ほど不満を持っている可能性がある。次回以降の精査が求められる。

【今後の分析課題】

都市教養プログラム部会で出された疑問に、成果平均 [問7] や満足度平均 [問8] が高いクラスを以て、優良な講義がなされたと見做して良いのか、というものがある。例えば、成績上位者のみの成果平均や満足度平均が高い場合に限り、優良な講義だと見做せるという立場もあり得る。

だがこれを調べるには、SE [学生による評価] の個々の回答者の回答バスケットと、回答者の成績データを、マージ（データ結合）しなければならず、そのためにはSE回答者を何らかの形でアイデンティフィケートする必要が出て来る。微妙な設問を含む以上、それは不可能だ。

但し、この問題を調べる次善の策として、小生の要望で授業の難易度 [問9] の項目が追加され、前述の通り（クラス平均ではなく）学生個人をサンプルとした満足度と難易度との関係を、「満足群の答える難易度」と「非満足群の答える難易度」を比べることで探索したのだった。

その結果、講義が易しかったとする学生が満足群に多く、講義が難しかったと答える学生が非満足群に多いものの、差は0.39であって、他の項目（問8 [時間] 除く）に比べて最小である。先に述べた通り「難解だから不満足になり、平易だから満足する」傾向は、大きくないのである。

この点について、(1)SE回答者の学生全体について学生個人をサンプルとして満足度と難易度の相関分析をした上、(2)クラス毎に学生個人をサンプルとした満足度と難易度の相関分析をし、(3)全体と各クラスの比較ないしクラス間の比較を通じて「講義が難解なのに満足度が高いクラス」を特定することもできる。こうした特定を、公開授業の選定に役立てることもできるだろう。